明治百三十八年日本高等小學校教科書

# 英國衰亡論 全

高藤建設株式会社

英國 某憂國者著
日本 椿園居士譯

# 英國衰亡論 全

東京 新橋堂書店發行

東京　隆鍾堂書店發行

# 英國憲法論　全

日本學士會員
英國法學博士
英國法學士
英國法學士

# 序文

歴史はヨーロッパでつくられる時代、しかも、その華やかな国際政治の舞台で、常に主役を演じていた大英帝国が、既に業病は深く、百年後には衰亡しているであろうという警世の書が、今から七十年も前に東京で出されていたことは驚嘆というほかありません。ユーフォーからオカルトブーム、或いはノストラダムスの大予言など、不安な世情を反映して二十世紀終末論が論ぜられる今日、本書が読者をひきつけるのは、大英帝国が七つの海を

支配して絶頂の最中、ローマ帝国の故事に学んで警告を発したという人間社会の科学であるということだと思います。

二十一世紀の盛衰を決める要因として、エネルギー、資源、人口、食糧、環境、それにこれらを横断する南北問題が挙げられ、数年来、わが国でも真剣に議論されている事は、改めて述べるまでもありません。本書にもあるように、産業と国民の乖離、お世辞政治や進学予備校化した教育、思想の根底にある物質主義を憂える声は少くありません。

九百年前、八幡太郎義家は後三年の役で雁行の乱れに伏兵を悟った。それは「孫子の兵法」に学んだと言いますが、その孫臏は二千三百年も前に「其の戦いを用なうや、久しければ則ち兵を鈍れさせ鋭を挫き、城を攻むれば則ち力屈く」「夫れ兵久しくて国利ある者は未だこれ有らざるなり」と説いています。ベトナム戦争を想い起こすまでもなく、宇宙時代にして、なお人間社会の真理に変わりはありません。歴史の教訓が生きる所以でもありましょう。

「古代文化没落論」でマックス・ウェーバーは「ローマ帝国は外側から滅ぼされたのではない」と語りかけています。ローマ帝国が、その奴隷構造の故に膨脹主義を繰り返えし、ヨーロッパ大陸を支配したとき、内部崩壊の運命にあったことは周知の事実です。改めてローマを引き合いに出すまでもなく、わが国の将来を憂える人々に、この書を紹介するものですが、私もまた同憂の一人として、雑念にふけりつつ、古い蔵書を整理中に眼にとまったこの書が、他山の石となる事を希って複刻す

る次第です。

昭和五十年三月

（明治百九年）

高藤　国太郎

# 叙

英國衰亡史、題何ぞ奇かる、此頃一書を得たり、題して英國衰亡史といふ、我同盟國たる英國は其領土に太陽の沒することかく其商工業の繁榮世界に冠たり、英國には隆興史こそあれ、豈に不吉かる衰亡史あらんや、譯者が之を手にしたるは夢か、イナ夢にあらず、現に書は我手中に在り。

尙ほ驚くべきは此書の表紙に見るに此書は紀元二千五年(明治百三十八年)我東京に於て發兌され、日本の小學校の教科書たりとの事是也、百年後の

我子孫が我同盟國の衰亡を語りて自家の教訓とかすを今日に見る、夢か、夢にあらず。

是の書實に昨年英國牛津（オックス、フォルド）に於て發兌されたる英國未來記にして名を百年後日本にての發兌に藉り、時弊を痛責して隆昌繁榮に醉へる英國人を覺醒せんとせるかり、倫敦タイムス之を評して此小册子は誇張の迹はあれど亦健全かる思想を含めりといへり、然れ共譯者は此書を讀んで英國の時弊よりも日本の時弊に適中せるもの多きを念ふを禁ずる能はず、一頁、二頁、五頁と讀み往くに隨つ

て、此書日本の未來記たるにあらざるやを疑ふと屢々かりき、日本の未來記たるか、英國の未來記たるか、何れにするも兩國ともに百年の後他人によりて其衰亡を語られざると是れ吾人の至願也、此願の爲めに譯者は不思議かる此書を譯して我國を愛する諸君に示すとかしぬ。

譯　者　識

# 緒言

此小册子は我小學校の上級生に用うる爲めに著せり、其長く教科書として用ゐられんをを望む、凡そ邦國の世界歴史に冠たるを欲するものは、復た他の邦國が其繁榮を槿花一朝の夢と化したるを知らざるべからす、若し帝國にして同一運命に陷るを避けんとならば、國民は小兒の時より先人の過を識り、避け得べきは之を避けざるべからず。二十世紀の初頭に於て英國民にしてギボンの羅馬衰亡論に注意したらんには今日此かる過誤に

陷るを無かりしなるべし、彼初に其注意を怠れり、其結果知るべきのみ、此の書を編するに當り、余は羅馬衰亡論の著者に感謝せざるを得ず蓋し羅馬の衰亡を論じたる多くの辭は直に移して二十世紀の英國に應用さるゝを以つて也、余は悉く之をギボンの著書に引用したり。

明治百三十八年　東京に於て　著者　識

# 英國衰亡論

英國某憂國者著
日本椿園居士譯

## 總論

十年前我同盟國の突然の凋落は醉生夢死の徒には豫想されざりしも、邦國の興亡を學び、其衰亡に至る原因を知れる少數の識者には敢て驚愕を與ふるとなかりしなるべし、心ある者誰か單に道德眼若くは冷靜なる歷史眼のみを以つて英國の凋

落を觀るを得んや、余は我國民が英國に注ぎし愛惜の情と我海軍を極西に送る能はざりし痛嘆の意の讀者に在るを知る、喜望峯を繞る長航海は此の如き急激なる國難に趣くには、餘りに冒險たり、假りに一時英國を此の不幸より救ひ得たりとするも、帝國の助力は唯だ暫時のものにして且つ不結果のものたるべし、英國民の弱點は一朝に之を拯はんには餘りに根底深し、英國民が世界の運命を左右せんとは最早沙汰の限りなり。

バビロン及アッシリアが其紀念碑を殘し、埃及が

三角塔を、カーセージが女王を、羅馬が法律を殘したるが如く、英國は沙翁と世界通用語とを其子孫に殘したり、而して英國の歷史は永く人類の教科書とのみなり、又其衰亡史は炫耀せる繁華が國家衰亡の萠芽とかり、竟に世界の覇權を喪失せしむるものたる事を現在の邦家に知らしむる教訓者とのみなれり。

印度は既に露國の手中に歸し、南阿弗利加は獨逸に埃及は土耳古に歸し、加奈太は米鷲の翼の影に庇はれ、濠洲は日本の保護國となれり、是等の諸邦

は羅馬大帝國の分裂したる諸邦の如く、唯だ共通の國語と共通の過去とを有するのみ。

未だ英國衰亡史の著されたるなし、支那歴史家の之を著さんとせるありと聞けど、別に其勞を取るの必要なし、蓋し余が緒言に述べたる如く、總てギボンの羅馬衰亡論に於て之を知るを得べければ也、ギボン著第七卷を學び、二十世紀初頭より其末尾に至る英國の記錄を對比して余は其衰亡の徵の兩時代全く相同じきに一驚を喫したり、而かも其異れるは唯た英國の衰亡の非常に急激なりし

と是のみ、理由は明瞭也、英國は非常に多くの競爭者を有したれば也。

余は千九百五年當時の英國大政治家の預言的擧動によりて筆を起すの可なるを思ふ、ローズベリー卿は英國の大競馬に捷ちたる馬にシセロの名を與へて得意滿面たりしが、シセロは一の大演說家たりき、彼は間斷なく又總ての問題を語れり、彼は古を語り、道德を語り、書籍を語り、政治を語り、ポムペーを語れり、彼の語るや悉く羅馬帝國に就いてなりき、彼が羅馬帝國に就いて語りて後、幾もな

く帝國は衰亡を始めたり、邦國は口の人に賴る能はずして、手の人に待たざるべからず。

千九百五年に於て英國議會は漸次シセロ及び其時代を追へりき、議會は辯者の會となりつゝあり、而して輿論の指導者とはならずなりぬ、換言すれば世の風潮のまに〳〵漂へる、當時流行の某東京新聞紙と異なる所なきに至りつゝありき。

英國々民の領袖にして既に此の如きを知らば日本の學生は其國土の縱橫を通じて所在に醜き癰腫の如き國家衰亡の表徵を見るも敢て驚くをな

かるべし、以下吾人をして之を推究せしめよ。

第一　田舍生活よりも都市生活を好みて其結果英國人の健康と信仰に及ぼせる惡影響

邦家衰亡の第一徵は國民が田舍の靜穩なる歡樂を棄てゝ慘憺たる都市の、人を壓する壯麗の中に住まんとを欲するに在り、正直なる羅馬の農夫の衰頽は實に羅馬衰亡の第一徵なりき、而して英國民亦是と同一なりき、農夫の體力は外氣に練るとを止めて以來漸次衰へて其自信力も隨つて衰へ

たり、是れ外國移住を嫌ふ者の增加によりて之を見るを得べし、其祖先は西班牙の無敵艦隊を滅ぼし、亞米利加の强健ふる殖民たりしに、悲むべき都市の人民は唯だ音樂堂と遊戯に餘り多く一身を任れたりき。

英國の爲めに辯護せんにも十九世紀及二十世紀の英國殖民は成効せるものにあらざりき、濠洲は堪ゑ難き負債を荷ひ且つ母國の惡しき缺點を表はし、南阿弗利加は其存立唯だ東洋勞働者の生産力に待つをとなりたりき、此時代に於て一の成効

したる殖民は唯だ加奈太に於ける救世軍勞働殖民ありしのみ、是れ米國最初の殖民の如く其成効一に神を信じたるに由る、殖民の成効は國家補助の殖民にあらず、孤獨的遍歴者にあらず、唯だ神を恐るゝ群隊の邁往直進するにあるのみ、此悲むべき時代に於ける英國民は漸次其神と其身を信ぜざるに至りき。

英國民の身體健康の衰弱に就いては余は尚ほ後に之を說くべし、而して農業衰頽の他の悲むべき結果に就いてギボン氏善く之を言へり、曰く、「チベ

リアスの時代より農業の衰頽を伊太利に見たり、而して是が爲羅馬帝國民は其の生命を風と波とに托するの危險を訴へたり」と、此事少しの變更を加へて英國に應用せらるべし、二十世紀に於て英國は層一層海外の輸入に待つに至れり、英國民は不整頓なる都市に集合して國歌を謠ひつゝあるに其砲は之を獨逸より輸入したりき、彼等は如何に生存せんかをトルストイ、ワグナー、トリューに示さんとして、今は却て如何に死滅するかを吾人に示すに至れり、國を愛するは過去の事也、今は國

よりも麵麭を愛せり。

第二　保養の爲めの外、海を顧みざる二十世紀英國民の趨勢

英國衰亡の原因無數かるが中に恐くは是れ最も恥づべきものたるべし、二十世紀の進み行くまに〳〵、自ら稱して『濤の子』とせし英國民も漸く水夫生活を敢てするを好まずかりぬ、印度水夫と歐大陸人とにより乘組まれたる船舶は海上に健康を求むる弱き英國の富者を乘せ、衰憊せる英國都人士は海濱に遊びて其柔弱かる身體を健にせんと

せるも、其の水夫を以つて其商船を艤ふとは止みにき、其の一朝事あり歐洲諸國と干戈を把つて起ちし時には相當の豫備海軍なかりし也、外國船の穀物を英國に運ぶ者も亦彼に背きたりし也、其衰亡の最後に於て其海軍と其商船とは都府の巡査と政府の技師とにより補充せられたり、吁、是れ皆か其敗亡の眞事情を知るに足らずや。

此かる災禍の來るを明白とかりつゝありし二十世紀初頭に於て英國に缺乏せるものは何ぞや、蓋し大統領ルーズヴエルト式の內閣員是也、職務に

剛毅にして、強健の身體と蓋世の意氣とを持し、國民をして歐洲諸國の軍備に汲々たる中に醉生夢死せしめざる人こそ、即ち當時英國に缺乏したる者たれ。

（千九百五年マスカーリー卿英國海員調査によれば英國海員中外國人船長五百十一人、運轉士二千九百九十一人、水夫四萬人ありて多くの英國商船の乘組員は全く外國人なりと）

## 第三　優美と贅澤の增加

ギボンは特に此點を論したるが、英國衰亡史を著す者亦之を忽諸に付せざるべし、兩國民の罪過は酷しく似かよひたりき、吾人は其快樂、贅澤かる宴

會、體育の嫌厭、土耳古湯の流行に兩國民が同一歸趣あるを看過する能はず、吾人は又た兩國に無責任かる資本家の其僕婢には巨額の金を浪費するも、其社會に對して何等盡すをを知らざる者增加したりしを知れり。

兩帝國が危機一髮の斷崖に達せし頃は其國民の生活費は一足飛に增加しつゝあり、又貧民問題は益す切迫したりき、穀物と麵麭の施與は羅馬國自衰の重かる原因かりき、而して千九百十年英國の學校兒童に食物を施與したるをは英國を荒廢せ

しめたる最も不幸なる僞善的行爲の一なりき、又兩國に於ては不健康なる父母增加し、强健なりし農夫も衰弱して其用を爲さゞるに至りき。

ギボンは羅馬が屢々ゴッス人に侵されたる當時、羅馬人の益す遊覽好こなれるに驚愕したり、曰く『熱心なる群衆は毎日詰旦其場所を得んが爲めに押し掛け、中には夜を込めて其附近の家々の戸口に彳み、眠らず場所の明くを待構ふる多し』と、此辭亦之を英國人に用うるを得べし、彼等はシェーキスピアを解せず、大俳優を識らずして、譯もなく演

劇を好みたり。

第四　文學及劇の趣味の衰頽

茲に又二十世紀の英國の文學及劇に付き最もよく適するギボンの語あり、曰く。

『詩人の名は殆んど忘れられ、演說家は詭辯家に壓せられ、批評家學を罔みし、天才亡びて、趣味の衰頽とかれり』

又曰く

『羅馬の悲劇、喜劇は其共和政斃れて後殆と聞く所無く、之に代りて放肆かる道化、柔弱かる音樂

及燦爛たる粧飾盛かるに至れり」

余は英國人にして其衰亡に付いて少しく書く所あるを見たり、而かも健全かる思想を持てるは稀にして、多少價ある者も其國民には顧みらるゝを無かりき、批評と註釋とは羅馬の如く盛なるも、天才は亦羅馬の如く缺乏を以つて顯著かり、好ましからざる佛蘭西小說の拙き模擬品が英國を通じて到る所に行かはるゝは自由を得たる英國婦人が其の自由を國の爲めからずして自己の爲めに用ひたるを一原因たり、當時倫敦美術館に美人が

其情人たる騎士をして神と國との爲めに戰はしむる一畫あれば之れに對して美人が男子を誘感墮落せしむる六畫あり、人々看て無心に得々として曰く『是れ衰亡かり』と、モルヒ子や煙草の犧牲者を仕組みたる小說はバンヤンやスコットの作よりも廣く行はれ、上下男女の區別かく其書架を飾る爲めに古書の廉にして飾りあるものを購ふも、之を讀むとは勉めて稀かりき、而して卑近かる演劇、繪入雜誌及び新聞紙は國民の智識上の食物たりき。

## 第五　英國民身體健康の漸衰

此問題に付いてもギボンは吾人の最善の指導者たり、其悲むべき物語は悉く前世紀の英國民の繰返す所かりき、其羅馬の衰頽せる地方に付き述べたる中に曰く、『紀律の弛廢と練習の停止は兵卒をして勤勞に從事するに適當からず、又之を欲せざらしめたり、彼等は甲冑の重きを訴へ、竟に鎧と兜を脱するを許され、其祖先が世界を征服したる重き武器、短き劍、恐ろしきピラムは漸々柔弱なる手より離れたり』と、

同一事情は亦英國軍隊に起りたりき、二十世紀の初頭、英國軍隊が南阿の敗亡を取返したるライフル銃は其兵卒に重しとせられ代ふるに輕銃を以つてせられたり、我軍隊と異かり英國歩兵は其背嚢を荷ふに苦しみ中には外套を荷ふに堪へざるあり、平時の行軍に際して落伍する者多く、又親切かる士官によりて其銃を肩にするを赦さるゝを多し、アルダーショットの觀兵式にすら堪へずして列を外づす近衛兵あり、其頃體格檢査は漸次其合格資格の身長と胸圍を短くせしが、而も煙草の

喫み過ぎ及不衛生かる生活の爲めに不合格とせらるゝもの益す多きに至れり。

余が既に述べたる如く、二十世紀の初頭に於て英國民は最早活動性の國民にはあらずかりぬ、殊に倫敦及其他の大都市に於て其然るを見る、羅馬人が擊劍に集合したる如く英國人は賭に集合し、クリケットやフットボールの如き野外遊戯は英國の遊戯とはからずかりぬ、而して但だボーリング(球轉し)の行はるゝを見るのみ、而かも英國民は自らは行はずして稱して競技好の國民といへりき。

尙ほ甚しき事あり、劇場は病院(居常餘りに室內に在りて陰鬱病に罹れる者の爲めに)とかり、新聞雜誌は虛弱治療の賣藥廣告を以つて充たされぬ、其身體の强弱が其身の幸福に關するとを知るも國民一般の虛弱が竟に如何に成り行くかを知らざりき、國民の進步既に根底を失ひぬ、但だ識者の少數が慨然書册を拋つて大聲疾呼、優勝劣敗の大法國民生活の上にもあるとを告げたるを見たるも、既に世界の覇者たるを得ざる英帝國は戮力協心して之を匡救せんとする者を出だす能はざりき。

## 第六　英國民宗教心の衰頽

人若し前に述べたる諸項を讀まずんば二十世紀英國民の宗教上精神上の熱心の缺乏に驚くかるべし表面には信心慈善の見るべきものありと雖も是れ弱き心が僞善と宗教上の儀式とによりて慰藉を求めたるに過ぎず、二十世紀の漸次進むに從つて人の實用的精神的勇氣は痛く缺如とかりき、而して多數は宗教改革によりて時弊を匡正せんとせしも、時弊の基く所を洞察して、根本的に之を匡救せんとせるは頗る少數かりき。

宗教と社會研究は羅馬に於ての如く英國に於ても一の時過しに過ぎずかりぬ、恒産ある者も自己の利益分配の一部分を犧牲に供して勞働者の時間を減ずるとはせずして、徒らに社會問題を縱談し犧牲の美に關する浩澣の書籍を讀みつゝありしのみ。

ギボンは多くの迷信の羅馬に行はれたるを指摘せしが、二十世紀の英國を見るに亦迷信の盛に行はれしを見るを得たり、禁厭(クリスチアン、サイエンス)及び手相は倫敦上流社會に流行し、唯物主義、

天命主義も勞働者及社會黨に柔軟かる律條を授けたるに過きざりき、而して資産ある道樂者はオーマー、カイヤムの哲學に其遁路を求め寺に失ひたる時間を酒場に取返すてふ教儀を其安心立命の條目とかしき。

僧侶牧師は其分に從つて努力はしたれど、其根本に於て過ちたりき、國教外の者こそ却て多く社會上政治上に國民進歩の爲に盡す所ありたれど、英國々教は常に社會組織の非常に不可かるを極力攻擊せる富者より貧民の爲に僅に三片宛許を醵

出せしめたるに過ざりき、國の資本を左右する會社の株主や取締役は其勞働者の取扱に關して法律を要求したれど、勞働者の健康、幸福に關しては何等考慮する所あらざりき、『資本に對する最高利得』とは彼等の毎年の叫かりき而して其利益分配を受くるや、其少數者は勞働嫌の勞働者に施しを爲すことによりて慈善家の名を博したりき、國教は熱誠ある有數の識者によりて高尚かる盡力ありたるに拘はらず、國民の信仰上既に其勢力を耄したりき。

基督教徒の盲目かる、其國を擧げて墮落に陷りつゝありしに拘らず、之に對して基督教として一致して事に當る能はず、各派の間には感情の衝突無益かる邪推盛に行はれたりき、各基督教に對する最上の要求は實に寛宏と熱誠の基礎の上に立ちて、悲むべき教儀の衝突を拋擲し、宗教上精神上に覺醒する外無かりし也、寺院は永く睡りつゝありき、而して其睡りつゝある間に國民は死滅したりき。

第七　租稅の增加及市府の濫費

羅馬帝國を滅亡せしめたる是等の弊竇は常に私人の企業を壓迫したる官府の存在に原因せり、外侵屢々到れる時官府の瓦解は憐れかる混亂に陷りたり、而して此弊竇の英國に於ても亦同樣かりしを見る、英國民は万事國家に依賴し來り、國家は其國民を教育し、養育し、鞭撻し、塲合によりては其小兒に衣服までも給せり、國家は又其國民の家屋に燈火を給し、文學を貸し(公共圖書館を意味す)電車を與へて、往復を便せしめ、安下宿を給し、其他此類の多費濫費甚だ多し。

千九百年既に國家が市の事業の爲めに一年十億万圓以上を費すの權利を地方團體に與へたるを見る、此の如き鉅大かる金額も、其大部分は市が營業する爲めに費され、而かも年を逐ふに從つて其金額非常に增加したり、此かる市の事業は多くは損失に陷り其收支相償ふが如く見ゆるものも其實年々之に補給を爲して表面上利益あるを裝ふに過ぎざりしといへり、是の故に此附加的支出に當つる爲め發行されたる公債年一年に增加し、其年々に增加する負債に對する利子は經常支出に

於て年々に增加し、竟に市に於ての住居は負擔の重きに苦しむに至れり、此かる事態は自ら事業經營の才能を誇りこせる英國民に取りては異常格別の事かりき、蓋し市民が市の事業を管理する當局者を選ぶに、事業觀を以つてせず却つて之を演說家として名ある者、若くば政黨員として名ある者に取り、以つて市の事務に當らしめたるに由る、是等の演說家政黨員は市の事務に當るに他人の金を以つて事業を營むことを知れるか故に、其事業經營には輕微かる注意を拂ふに過ぎざりき、彼等

は僞善を行ひ、僅かかる名聲を博さん爲めに恩を公衆に賣り、結局市と國家とをして破産に等しき狀態に陷らしめたり

グラッドストン氏は種々の誹謗を受けたる人かるも其大財政家たりし事は之を否認するもの少かかるべし、其箴言に曰く『政府の事務は政治するに在り、商賣するにあらず』と、若し英國にして此片言に藏せる深奥かる眞理を悟了したらんには英國の幸たりしからんも、如何せん英國の政府當局者は演說を能事とし、國家よりも政黨を第一に置

き、投票を釣ると、及び他人の金を餌に投票を釣ることを勉めたり、事業かる者は此くては成効すべき樣かし、事業は猶ほ戰爭の如く怖るべきもの也、唯だ近世的商業を支配する複雜かる法則を全く了解せる人によりてのみ處理されざるべからず、若し此法則に從はざらんか、唯だ自ら其運命の覆滅を招くあるのみ、由來公共の爲めに盡す或事業は利益少かく若くは多少の損失ありとも、寧ろ之を可こせんも、之を大規摸にして而かも漸次之を膨脹せしむるは財政上の衰亡を招くものたるを知

らざる可らず。

第八　不忠實かる英國教育制

教育の眞目的に二あり、一は忠良かる國民を造るに在り、一は兒童に生活を爲すに適當なる智識を與ふるに在り、而して彼等に政治、美術、商業上の大家たるに足るべき智識を與ふるを不必要かりとす、此教育の二目的は之を分離するを得ず、蓋し職業を得るに適當かる教育無き者は往々信用すべき國民たること難ければ也。

人は兒童に對する家庭の勢力を認識するを謬れ

ども兒童は其兩親の唇より及其生活より感化さるゝと多し、誰か青年が始め其母を尊敬するを知らずして社會に出てゝ婦人を尊敬せんや、誰か少女が其父及兄弟を尊敬し信用するを知らずして人の良妻たり得るあらんや、學校の教室からぬ家庭は帝國民を教育する最良の學校也、而して學校教師は此粗製品を受取りて之を精製するも、兒童は其世に出づるまでに陶冶したる教師に對して其精神を傾倒すると稀也。

請ふ吾人をして英國教育の實際問題に入らしめ

ふ、英國の教育制は到底非難を免るゝ能はざる也其教育に費すと鉅大にして其効果の之を償ふ能はざるや寧ろ滑稽かり、第一其小學校を見よ、其兒童の大部分は成長して耕作若くは手工を事とせざるべからざるに、學校に於ては農業も木工も機械も其他實業に關して一切教ゆる所無く、課業は重に文學的かりき、曾て土地を耕やさず自己の自轉車すら修理するとを知らざる牛津及キヤムブリッヂの卒業生が視學に任命され、英國初等教育を監督するが故に、其兒童は竟に耕作を嫌ひ手工

を嫌ふ結果を生ぜり。

由來書籍は少年に教ゆる總ての手段にあらず、而して學術として農業を愛し、蒸汽機の詩を理解せしむるは古代王の話や神話よりも感化の眞淵源たり、農夫の子に土地や土壤の性質を教にずして、歴史の千百を教ゆるは無用の事ふり、跛的教育の結果は憐むべきものにして、其子弟が勞働を嫌ひ手工を嫌ふは當然の成行たり、我教育に於ても之を鑑みずんは我東京の子弟も官廳や銀行會社の椅子に腰を掛くることを智能ある農夫及職工より

も高尚かりと思惟するべし。

斯かる事實は明に英國に起れり、多數の兒童は生長して勞働を嫌ひ、紳士とは其手を役するを耻づる者かりと考ふるに至れり、次で起りたるは是等多數の子弟が海を棄て、土地を棄て、手工を棄て、商賣に走りたると是也、商賣は是が爲めに競爭を烈しくし結局商業上に不誠實と商業の不振を招けり。

英國小學校の教育法は男生に不實用不自然かると同樣に女生に對しても常識を缺きたりき、多く

の場合に於て女生は料理法、育兒法、家事經濟を教ゐられざりし也、誰か英國が文學と商業とのみの上に其帝國を築き得べしとせしことを不思議とせざるあらんや、男は田を耕すを怠り、女は其子に哺乳せしめざるが如き文明は虚僞の文明也。

吾人更に英國の中學、大學を見るに、必らずしも實用的からずといはざるも成効には遠しといふべし、學生は競技に熱心するも現實の問題を研究すること少し、例へば牛津の學生南阿戰爭に從軍したるも、歸つて近世歴史を學ぶに、大學は近世戰爭の

戰略に及ぶを許さゞりき、バンノックバーンの戰爭や薔薇戰爭は圖を引きてまで之を說明するも米國南北戰爭や、印度境界戰の如きは餘り近過ぎて詩的趣味を缺くこせられたり、誰か此かる狀況の下に敎育されたる政治家がライフル銃よりも多くゴルフ杖を識り、帝國の軍備よりも多く議會政略を識れるに驚かんや。

第九　英國防備の無力

英國は羅馬よりも至難至艱の場合に遭遇したりき、第一英國は歐洲文明國の軍隊と戰はざるを得

ざりしか、羅馬の敵對者は多く不熟練かる野蠻人かりき、第二羅馬帝國の領土は英國の殖民地、屬國ほど全地球に散在せざりき、而して英國民は其領土の如何に攻擊され易き位置に居るかを自覺せず、其の一致協力の義務を自覺せざりし也。

南阿戰爭は英國の一部分を防ぐにすら如何に多くの軍隊を要するかの實例を英國民に示したるに拘らず、英國民は尙ほ軍艦さへあらば顧慮する所無しとしたるか如く見ゆき。

百年前千九百五年、南阿戰爭を敗亡より救ひしロ

バーッ元師は英國民か其邦家を圍める危險を知らず、自ら之を防禦し能はざる事情を識らざるを指摘したる以來如何にかりしぞ、國家危急存亡の秋、『各自其本分を盡す』てふ理想を殘せしチルソン提督の歴史を互に語り合ひつゝも盡すべき本分の如何かるかを少しも知らんとはせさりき、吾人は唯だ言ふを得べし、曰く英國民は其國家を愛するを忘れたりと、彼等は過去邦家衰亡の迹と優勝劣敗の大法を學ぶよりも其商業、其貨物、其競馬の爲めに餘りに多忙かりき。

英國は必らずしも徴兵法を採用するの要かし、全國の壯丁悉く三四個月を軍隊生活に委せしむべきと、全地球散布の領土を防禦するに絶對的必要かりし也、彼等の所謂自由かるものゝ弊は、其父母を尊敬せず、其年長に信賴せず、妄りに我儘を押通すに在りき、是等の壯丁を驅りて四個月間規律嚴正かる軍隊生活を爲さしめば、以て社會に新かる風潮を與へ、國民各自をして國民の義務を自覺せしむべかりし也、南阿戰爭の後ロバーツ元帥の英國應募兵及國民軍の無能かりしを說いて曰く『現

在の組織にては英國は其應募兵及國民軍に信賴する能はず、或る改革は必らず之に施さゞるべからず、尙ほ多くの訓練を之に與ふるか、其の軍隊を創造するの手段を執るか何れかの改革を施さゞるべからず』と。

＊　＊　＊　＊　＊

却說、吾人は我國人特に我少年に向つて注意すべき事あり、蓋し我帝國は多くの點に於て英國に類せり、吾國民は英國エリサベス時代の如く頑强かる體格を有し、大陸の外に立ちて貿易は增進し、海

軍は誇るに足るべき島國民たり、是の故に吾人は過去の邦國の歴史を讀み自ら戒むる所無かるべからず、英國人が羅馬の衰亡を學ばざりしに鑑みて、吾人は深く英國の衰亡に學ばざるべからざる也。

英國衰亡論 終

明治三十九年三月九日印刷
明治三十九年三月十二日發行

定價金廿五錢

著作者　玉木懿夫
發行者　野村鈴助　東京々橋區出雲町一番地
印刷者　中村政雄　東京京橋區廿間堀三丁目十番地
印刷所　報文社　右同所

不許複製

發行所　東京京橋區出雲町一番地　新橋堂書店（電話新橋三六七七番）
再発行所　北九州市門司区東新町一丁目一番三〇号　高藤建設株式会社